

2023年1月

■今月の特選句



電柱も棒立ちとなり冬の朝

上山美穂

電柱はもともと棒立ちしてるんだから当たり前じゃん、なんて言っちゃダメ。滑稽俳人たるもの、このナンセンスな可笑しさが分からなくっちゃ。



表裏裏裏表落葉道

小泉和子

文字の一つ一つが一枚の葉っぱみたいで、自然をそのまま写生して見せている。しかもちゃんと五七五のリズムである。一切の無駄なし文句なし。



芋掘りの園児コロコロバスを降り

壽命秀次

「コロコロバスを降り」としてこの後に掘り上げる芋の様子まで予告して巧み。コロコロのオノマトペがよく効いて楽しく子どもの可愛らしさも伝わる。

■今月の特選句

2023年1月



眼鏡掛け眼鏡を探すレノンの忌

峰崎成規

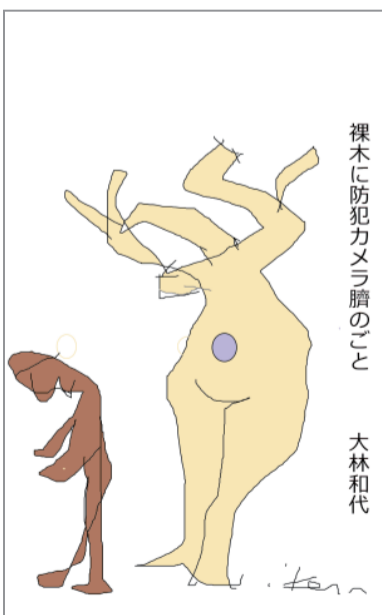
ジョン・レノンが久しぶりにこの世に現れたら、まずあの古臭い眼鏡を探すに違いない。忌日の句はこんなふうにご故人と共感できるといいね。



熱爛に決定女将の処方箋

月城花風

家族にも友人にも話せない事ってあるんだよ。むしろ家族、友人だからこそ話せないこともね。うーん、分かるわ。これが効くからお飲みなさい。



裸木に防犯カメラ臍のごと

大林和代

葉が茂っている時には気付かなかったが、裸木になって丸見えに。おや、まるで木の臍じゃないかとは楽しい発見。監視社会には笑いの息抜きを。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

大風呂敷聞いてあげてる日向ぼこ ・・・聞き役さんはボランティアだね	青木輝子
鯛焼の鯛と目が合ひ尾から食べ ・・・いつそ丸ごとひと飲みませむ	井野ひろみ
塩を振る舟のかたちの白菜に ・・・塩ははらはら初雪のごと	吉川正紀子
金色の蝶を放ちて大銀杏 ・・・蝶はきらきら音譜のやうに	南とんぼ
吾輩は激辛自慢鷹の爪 ・・・この句に潜む漱石の猫	小笠原満喜恵
湯豆腐や豆腐の角も食べちまお ・・・ぶつけて怪我をしないためにね	谷本 宴
息ふつとかければ消えし冬の虹 ・・・はかなき恋の記憶にも似て	日根野聖子
バリバリと割れるかの音海凍る ・・・バリトン歌手の重低音か	高岡昌司
厚物の菊の花弁にある浮力 ・・・流されたとて沈まぬ仕掛け	工藤泰子
かさぶたを剥がしたくなり日向ぼこ ・・・かさぶたの下まつさらな吾	桑田愛子
あおむしさんはようしなさい冬支度 ・・・そんな忠告虫は無視する	森岡香代子
片耳にマスクぶら下げよくしゃべる ・・・イヤリングではないのにね	田村米生
去年今年貫く棒に端あるか ・・・アインシュタインならば知つてる	北熊紀生

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

魯田のこぼれし米に群雀	相原共良
「猪が出た」となりの庭に牙の痕	相原共良
熟柿を狙う鳥と小鳥たちと吾	相原共良
胸算用スカを喰らいしお年玉	青木輝子
ふるさとで小原庄助三が日	青木輝子
履歴書に賞罰記す神無月	赤瀬川至安
腹痛の投薬効かず玉子酒	赤瀬川至安
救急車呼べど来るは消防車	赤瀬川至安
先走る気分鎮めむ十二月	井口夏子
ホットコーヒーふうふう吹けば息白し	井口夏子
寒鯉はほのかに紅の色をして	井口夏子
柿熟したかと鳥に聞いて追い払い	池田亮二
勤労感謝古女房と古畳	池田亮二
秋の海の何見据えるや龍馬像	石塚柚彩
秋の潮鳴門の渦はどちら巻き	石塚柚彩
秋の旅俄か遍路のお砂踏み	石塚柚彩
節季候(せきざろ)のどこが風雅よ厚かまし	伊藤浩睦
掛取の来ない隣は自己破産	伊藤浩睦
先送り嘘で固めて年の暮れ	伊藤浩睦
たんぽぽのぼぼの辺りがわからない	稲沢進一
山眠る睡眠不足とは違ふ	稲沢進一
正論は次の機会におでん酒	稲沢進一
優先席は若者ばかり神の留守	稲葉純子
引力忘れぬ八等分の冬林檎	稲葉純子
小春日のベンチは爺の特等席	稲葉純子
見掛け良き注連飾りあり百均に	井野ひろみ
暖かな夢を見たくて布団干す	上山美穂
携帯の迷子になっている師走	上山美穂
タクシー行く冬三日月のその下を	梅野光子
冬の道かさこそ落葉に追ひ抜かれ	梅野光子
不眠症がブラボーとなりサッカー観る	梅野光子
淑気満つ炭素レスへと新世界	遠藤真太郎
セーターを肩で着こなす色男	遠藤真太郎
嫁が君薬手帳の六冊目	遠藤真太郎
ふる里につながつてゐる納豆の糸	大林和代
手足退屈十二月の待合室	大林和代
行儀よく大根並ぶ軒の下	小笠原満喜恵
姉さんに我が名呼ばるる日向ぼこ	小笠原満喜恵

元日の門のあたりにコロナ君	岡田廣江
紅梅の樹液はきっと紅い色	岡田廣江
横断歩道きちんと渡る冬の猫	岡田廣江
夏の湖清らか雲の下半身	北熊紀生
糸蜻蛉肥りし秋の横を飛ぶ	木村 浩
蜻蛉釣り今だとどこでできるのか	木村 浩
もつ鍋を食べにきんしゃい博多まで	金城正則
松山に鯛めし食べに行きたいね	金城正則
つれあいとぜんざい食むや法善寺	金城正則
スケボーが皺を伸ばすや冬の街	久我正明
新米やこれは不味いとお茶漬けに	久我正明
誰もが冬誰もが睡眠不足	久我正明
紅葉狩装束と致しけり	工藤泰子
寒気吹き飛ばすドーハの歓喜して	工藤泰子
甲板の風を浴びをり星月夜	桑田愛子
背もたれの無い椅子ポツン年暮るる	桑田愛子
トンネルを潜れば十戸枇杷の花	小泉和子
茶の花やきり振り向くイヤリング	小泉和子
高齢者ばかりの氏子秋祭	壽命秀次
若者はマジッスかと言ひ林檎剥く	壽命秀次
風の手の中か百万本の秋桜	白井道義
一服が長き庭師や松手入	白井道義
祓はれて靴にはき替へ七五三	白井道義
お歳暮の送り送られ同じ品	鈴鹿洋子
高く盛るセルフうどんの寒卵	鈴鹿洋子
カーディガン肩に仮眠のナースかな	鈴鹿洋子
残ってる力小出しに歩け歩け	鈴木和枝
シャボン玉蜘蛛の巣上手に避けている	鈴木和枝
うろこ雲が手招きしてるよシャボン玉	鈴木和枝
飯盒の野ぶどうぶつぶつ酒になる	高岡昌司
野良犬だけが自由を知ってる冬の朝	高岡昌司
妻とゐて俳句を想ふ夜長かな	高須賀溪山
トイレトペーパーの綺麗に裂ける文化の日	高須賀溪山
「連れ合ひは…」のろける話文化の日	高須賀溪山
正装に欠伸殺して神迎	高田敏男
節約の空想旅行女正月	高田敏男
見納めの焚火となるや悪書焼く	高田敏男

異星人の如き息子と踏む落葉	高橋きのこ
戯れに子に背負われてみる冬夜	高橋きのこ
われ縄文人の末裔栗拾う	高橋きのこ
初稲荷外(と)つ国人はコンと言ふ	竹下和宏
愛猫ににやんと素敵な年賀状	竹下和宏
鍋奉行の機嫌で動くお菜箸	竹下和宏
凧やわれ颯(おとがい)を養へり	田中 勇
小春日の飛鳥路恋を思ひ出す	田中 勇
これだけは成さねばならぬ残る虫	田中 勇
携帯の震えるほどの寒さかな	田中やすあき
テストにはここが出ますと冬の塾	田中やすあき
夜廻りの尻のポケット発光す	田中やすあき
雪蛍白き上着にじゃれており	谷本 宴
右足の外反母趾にも冬来る	谷本 宴
冬帽子いつも探している僧侶	龍田珠美
焼却の煙の速さ冬の雲	龍田珠美
日脚伸ぶ半額奉仕の姫だるま	龍田珠美
赤き息出そうなポストあゝ寒い	田村米生
大根やあの人の足思い出す	田村米生
人生を語る若者おでん酒	月城花風
雨女と名高き友と夕時雨	月城花風
当たるとは誰も思わぬ河豚鍋は	土屋泰山
赤ら顔酔うているらし人参は	土屋泰山
冬銀河大河ドラマよりわくわく	土屋泰山
朝焼はまるでスイーツグラデーション	坪田節子
ドーハの奇跡初雪に祈りつつ	坪田節子
スキー履みがく手弾む雪だより	坪田節子
孫残す潤目鯛のほろ苦さ	長井知則
和洋折衷おでんにロールキャベツかな	長井知則
雑炊の三杯夕飯のメとして	長井知則
息子らと寄鍋つつきゆるむ夜	永易しのぶ
蜜柑手にじいじばあばと東京の孫	永易しのぶ
のんびりとしたくて薄い日記買う	永易しのぶ
象舎へと身の程知らず寒雀	西野周次
悶絶をしたる紅さに七竈(かまど)	西野周次
法螺吹き天井知らず浜焚火	西野周次
ダイオキシン怖くてサンタ宅配便	花岡直樹
片付かぬ部屋で妥協の去年今年	花岡直樹
来年こそビールお屠蘇に立候補	花岡直樹

じゃこ天の揚げたてに列文化の日
 深秋や大統領のナツパ服
 食レポの一言を待つあげびの実
 出払ひて天下とつたる炬燵かな
 電気代値上げ省令日向ぼこ
 吊革の喜んでゐる暖房車
 お歳暮や自分に贈るならどれを
 悩み事浸み込んでゐる冬の雲
 アニサキスチロクロチロと生秋刀魚
 馬肥ゆるトランプ吠える米選挙
 年惜しむコロナコロナは過ぎし夢
 父さんは黒子に徹す七五三
 牡蠣の口ミルクを吐けとこじ開ける
 煤逃のちよいとがもはや日の暮れて
 年越しやまた膨らます空元気
 寒猿のボスはプーチン知らんけど
 魔女よりも怖い群衆ハロウィン
 鯛焼を齧りて甘いプロポーズ
 日向ぼこ欠伸の猫を友として
 婆ちゃんは腹こはすほどの熟柿好き
 コロナ禍をなんとかできぬか雪女郎
 隙間風頭の中に今と過去
 おそらくは太い大根葉のわさわさ
 すき焼用か自転車かごの白葱は
 熱爛のゆびに耳たぶ摘まれる
 この人は愚痴が多くて毛糸編む
 手も足も出ない潤目を焼いている
 君子にはなれず手を出す酢牡蠣かな
 一昨年の残りそのまま風邪薬
 神の留守それでも地球は自転する
 国有の富士を借り受け初湯かな
 二次元の水二次元の紙を漉く
 季語の座を脅かされるマスクかな
 今どきの海鼠は黒いダイヤとも
 白鳥に遇えば得した心地かな
 寒風やマラソン選手の口呼吸
 「長葱はシャキシャキ？トトロ？」問う友や
 ハンカチのすみっこ刺繍の雪達磨

浜田イツミ
 浜田イツミ
 浜田イツミ
 久松久子
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 椋本望生
 村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八塚一青
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳村光寛
 柳村光寛
 柳村光寛
 山内 更
 山内 更
 山内 更

無になってウォーキングする年の暮	山岡純子
飽き足らず鍋三昧の晩ごはん	山岡純子
お蜜柑が主食なんです伊予の女(ひと)	山岡純子
きぶくれをウォームビズだと胸を張り	山下正純
本当は細身と言い訳着ぶくれて	山下正純
赤鼻のトナカイ急募されている	山下正純
SNSみんなが撮った赤い月	山本 賜
小春日や鳥獣保護区に眠る猫	山本 賜
冬の日の急ぐ速度や競技場	山本 賜
異国語の飛び交う工場年詰まる	山家志津代
伯母様も葡萄酒召さるる生誕祭	山家志津代
町医者の見立て手短か年詰まる	山家志津代
主待つすずなりの柿瘦せにけり	横山洋子
ひとけなき道をたたくやキセキレイ	横山洋子
をちちの明かり消し待つ赤き月	横山洋子
今年米梅干ひとつあれば足る	吉川正紀子
かりそめの恋風のごと神無月	吉川正紀子
冬籠もり老いさらばえて口達者	吉原瑞雲
皺の手やふる里の雪なつかしむ	吉原瑞雲
思ふまま生きたし五年日記買ふ	吉原瑞雲
冬の蠅あかんべえして逃げてゆく	渡部美香
冬耕の土黒々と寡黙なり	渡部美香
粥啜る葱の不揃ひ気にもせで	渡部美香
文化の日齢一つをよつこらしよ	和田のり子
大根煮て一日労ふ胃の袋	和田のり子
狐らも皆既月食見上げるや	和田のり子